

## 情報（所内研究報告（人口））

## 国際的・地域的視野から見た少子化・高齢化の新潮流に対応した人口分析・将来推計とその応用に関する研究

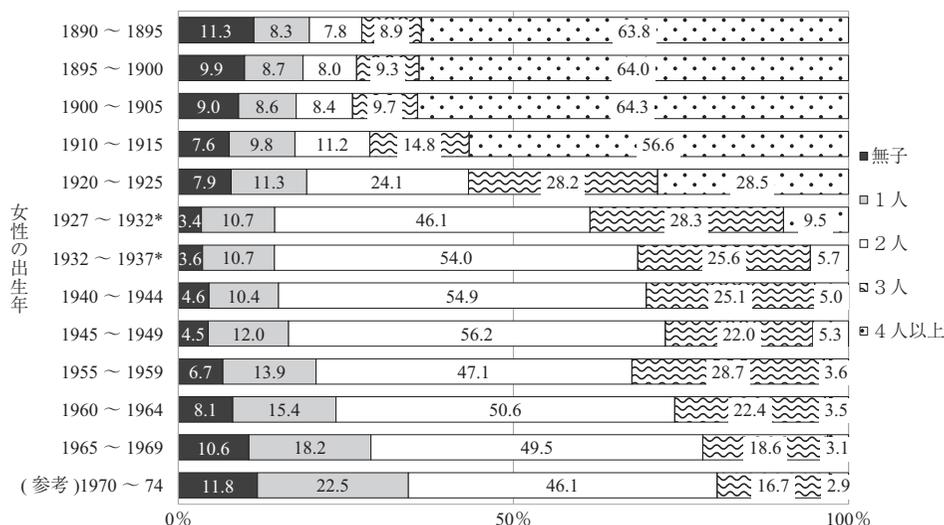
小池 司朗\*

国立社会保障・人口問題研究所（以下、社人研）において実施している全国と地域別の人口および世帯数の将来推計は、国や地方自治体をはじめとする各種機関の施策立案等において広範に活用されており、社人研の基幹事業のひとつとなっている。特に2000年代後半以降、日本は長期的な人口減少局面に突入し、将来の人口や世帯数の推計にあたっては、先進諸国等における最新の研究を反映した分析の深化や、科学的に実行された将来推計を基礎とした定量的な政策の議論が求められるようになってきた。こうした動きを受けて開始されたプロジェクトが、厚生労働科学研究費補助金（政策科学推進研究事業）「人口減少期に対応した人口・世帯の動向分析と次世代将来推計システムに関する総合的研究」（平成26～28年度、研究代表者：石井太）であり、出生・死亡・人口移動等に関する最新の動向を踏まえた各種分析や新たな推計モデルに関する研究、将来推計を活用した政策的シミュレーションに関する研究などが展開されてきた（石井 2018）。ここで記載する厚生労働科学研究費補助金（政策科学推進研究事業）「国際的・地域的視野から見た少子化・高齢化の新潮流に対応した人口分析・将来推計とその応用に関する研究」（平成29年～令和元年度、研究代表者：石井太（令和元年度のみ小池司朗））は、上記厚労科研の後継プロジェクトであり、2010年代前半から目立ってきた国際人口移動の活発化や、2014年から政府が主要施策として掲げた地方創生に伴う地域別将来人口推計への関心の高まりなど、将来推

計を取り巻く新たな環境の変化に対応した研究の遂行を主目的としたものである。本厚労科研は大別して、「国際的・地域的視野から見た少子化・高齢化の新潮流に対応した総合的な人口・世帯の動向分析」、「地域・世帯推計に重点を置いた将来推計モデルの深化に関する基礎的研究」、「将来推計を活用した政策的シミュレーションに関する研究」の3項目の課題領域ごとに進められた。多岐にわたる研究が実施されたため、紙幅の都合により、以下では3項目のなかから研究成果を抜粋して紹介する。

「国際的・地域的視野から見た少子化・高齢化の新潮流に対応した総合的な人口・世帯の動向分析」では、先進諸国等における最新の出生・死亡研究、全国・地域別の出生・死亡・移動とその人口学的メカニズム、離家・結婚・同棲・離婚等の世帯形成・解体行動、外国人人口の分布と移動、移動と世代間関係に関する研究動向や最先端技術のレビュー、データベース整備および基礎的分析を行った。これらのうち、日本における出生行動と意識の長期的変遷に関する研究（守泉 2018）では、「人口動態統計」や「出生動向基本調査」等のデータを用いることによって日本の出生力転換過程を概観するとともに、近年の少子化に至る出生動向の分析が行われた。コーホート別の完結出生子ども数の推移をみると（図1）、1920年代以前の出生コーホートでは「4人以上」が6割以上を占める構造で安定していたが、その後は避妊の普及の影響もあり、1930年代後半出生コーホートでは「2

\* 国立社会保障・人口問題研究所 人口構造研究部長



注：\*は初婚どうし夫婦の妻について。その他は既婚女性について。

出典：守泉（2018）の図4。

図1 女性の生まれ年別にみた、完結出生子ども数の分布

人」が半数以上を占めるという急速な変化が起こった。さらに1950年代出生コーホート以降では「0人」や「1人」の割合が上昇し、理想子ども数でみた子どもの需要も低下していた。1970年代半ば以降における少子化の主因は出産の先送り行動であることがこれまでも指摘されてきたが、近年では先送りが逸失に至るケースが増えていることを示唆するデータといえる。

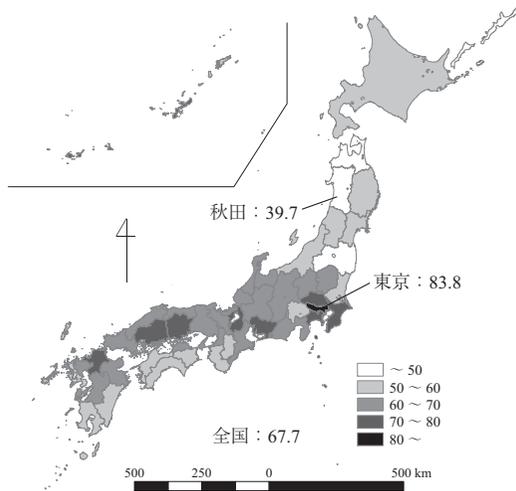
「地域・世帯推計に重点を置いた将来推計モデルの深化に関する基礎的研究」では、全国推計に関連しては、日本の近年の結婚・出生・死亡動向や外国人の転入超過傾向に適合した推計モデルの開発等、地域推計と世帯推計に関連しては、国際人口移動の地域的差異に関する研究や、地域別出生数および死亡数の将来推計に関する研究、世帯推計の市区町村別推計への適用可能性に関する研究等を行った。これらのうち、地域別出生数および死亡数の将来推計に関する研究（小池ほか2019、菅ほか2019）は、地方創生に伴って地域別将来人口推計への関心が高まっているなかで、地方自治体に求められている地方人口ビジョン作成における参考資料として活用されることを目的と

したものでもあった。本研究における出生数と死亡数は、「日本の地域別将来推計人口（平成30年推計）」による推計結果を利用して、地域別の出生数と死亡数の合計が「日本の将来推計人口（平成29年推計）」（出生中位・死亡中位仮定）による全国の出生数と死亡数に整合するように、事後的に推計を行ったものである。2010→2015年の日本人出生数を100とした2040→2045年の日本人出生数を都道府県別にみると（図2）、全都道府県で100を下回るが、東京都（83.8）から秋田県（39.7）まで大きな地域差がある。

「将来推計を活用した政策的シミュレーションに関する研究」では、日本人・外国人の国際人口移動に関する政策変化と将来の人口規模・構造への影響、国際人口移動施策の違いが人口動態と将来人口に及ぼす影響の方法論を研究するとともに、外国からの介護人材確保と社会保障制度との関係についての基礎的な分析、外国からの介護人材確保と社会保障制度への影響と課題に関する分析と政策シミュレーションのシナリオ設定に関する検討により、外国からの介護人材確保と社会保障制度との関係について政策提言の提示等を行っ

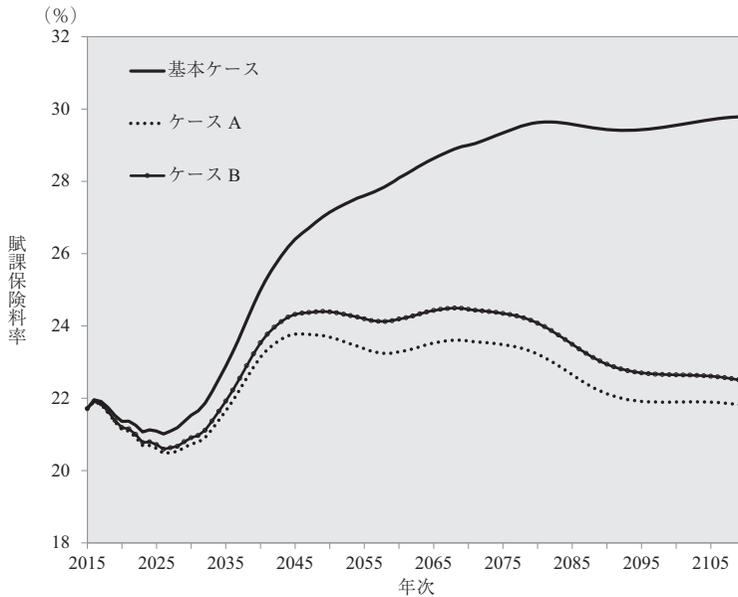
た。一例として、外国からの介護人材確保と社会保障制度との関係についての将来人口・社会保障シミュレーション（石井ほか 2020）では、介護労働者の受入れのシナリオを具体的に設定し、外国人受入れが公的年金財政に与える影響のシミュ

レーションが行われた。図3は、下記の3つのシナリオに基づくマクロスライド調整前の賦課保険料率の見通しを示したものである。「基本ケース」は、日本の総人口が「日本の将来推計人口（平成24年1月推計）」（出生中位・死亡中位仮定）と同様



出典：小池ほか（2019）の図3。

図2 2040→2045年の日本人出生数指数（都道府県別，2010→2015年日本人出生数=100とした場合）



出典：石井ほか（2020）の図7。

図3 賦課保険料率（マクロスライド調整前）の見通し

に推移した場合である。「ケースA」と「ケースB」はともに毎年10万人の女性外国人介護労働者が移入することを仮定しており、「ケースA」は受入れた労働者がすべて厚生年金適用となる場合、「ケースB」は当該労働者が厚生年金と国民年金に50%ずつ適用される場合である。「ケースA」と「ケースB」を比較すると「ケースA」での賦課保険料率の方がより低く、外国人介護労働者をすべて厚生年金で適用した場合の方が厚生年金財政にとってはプラスの効果が大きいことがわかる。

以上、本厚労科研で行われた研究のごく一部を紹介したが、一連の研究のなかで、社人研において実施している全国・地域別の将来人口推計ならびに世帯推計の手法の改良や推計精度の向上につながる知見が数多く得られた。これらの成果を発展させると同時に、2010年代後半において顕著となってきた出生数の急減や東京圏一極集中の拡大、さらに2019年から新たな在留資格「特定技能」での外国人受入が可能となるなど日本の人口動向に関連する最新の変化に対応した研究を推進するため、令和2年度より本厚労科研の後継プロジェクトとなる厚生労働行政推進調査事業費補助金（政策科学推進研究事業）「長期的人口減少と大国際人口移動時代における将来人口・世帯推計の方法論的発展と応用に関する研究」（令和2～4年度、

研究代表者：小池司朗）が実施されているところである。

#### 参考文献

- 石井 太 (2018)「人口減少期に対応した人口・世帯の動向分析と次世代将来推計システムに関する総合的研究」『社会保障研究』, Vol.3, No.1, pp.155-156。
- 石井太・小島克久・是川夕 (2020)「外国からの介護人材確保と社会保障制度との関係についての将来人口・社会保障シミュレーション」『国際的・地域的視野から見た少子化・高齢化の新潮流に対応した人口分析・将来推計とその応用に関する研究 令和元年度総括報告書』, pp.193-212。
- 小池司朗・菅桂太・鎌田健司・石井太・岩澤美帆・山内昌和 (2019)「日本の地域別将来推計人口からみた将来の出生数」『国際的・地域的視野から見た少子化・高齢化の新潮流に対応した人口分析・将来推計とその応用に関する研究 平成30年度総括報告書』, pp.199-210。
- 菅桂太・小池司朗・鎌田健司・石井太・山内昌和 (2019)「日本の地域別将来推計人口からみた将来の死亡数」『国際的・地域的視野から見た少子化・高齢化の新潮流に対応した人口分析・将来推計とその応用に関する研究 平成30年度総括報告書』, pp.181-198。
- 守泉理恵 (2018)「日本における出生をめぐる行動と意識の長期的変遷に関する分析」『国際的・地域的視野から見た少子化・高齢化の新潮流に対応した人口分析・将来推計とその応用に関する研究 平成29年度総括報告書』, pp.85-99。

(こいけ・しろう)